

Ewan MacColl の *Uranium 235* における核文化

The Nuclear Culture in Ewan MacColl's *Uranium 235*

廣瀬絵美

はじめに

Ewan MacColl (1915-1989)は、1950年代から60年代に勃興したイギリスのフォークリヴァイヴァルを率いた歌手・ソングライターとしてその名が知られているが、それ以前は、Jimmy Miller という本名を名のり、イギリス共産党との関わりが深い政治劇団 Theatre Workshop の俳優・脚本家・演出家を務めていたという事実はあまり知られていない。Bernard Shaw に「昨今のイングランド演劇において MacColl という男は私を除いて、唯一無二の天才である」(qtd. in Cox 40)と言わしめた MacColl の戯曲は30年代の大恐慌、ファシズムの台頭、第二次世界大戦という激震の時代を背景に資本主義社会や権威主義を痛烈に批判した政治色の強い作品であり、さらに音楽やダンス、照明や特殊効果を取り入れた当時としては実験的な劇であった。本発表では1946年に書かれ、同年から1952年の間に Theatre Workshop によって上映された *Uranium 235* を取り上げ、そこにおける核文化を分析することにより、反核文学としての戯曲の役割をみた。核文化とは、Wills の定義によると、「近代の原子科学」の産物であり、より具体的に言えば、「原子力や核兵器の開発における一般的なイメージや捉え方」を指している。つまり核文化とは「戯曲、映画、連続読み物、漫画、小説、SFもの、学術論文、専門記事、大衆向けの科学書」(Wills 60)といった広い分野を含んでおり、このような媒体を通して、核がどのように表象され、人びとの間で共有され、文化として機能してきたかという核文化を研究する上で重要なポイントとなる。Wills は、アメリカと比べると、「イギリスの核文化はほとんど無視されてきた」(60)と指摘している。しかしながら、数は少ないものの、核を扱ったイギリス小説には、H.G.Wells の *The World Set Free* (1914) や J.B.Priestley の *The Doomsday Men* (1938)があり、すでに早い時点で、核兵器の破壊的な力を予期している。MacColl の *Uranium 235* は、イギリスではじめて原子爆弾の脅威を描いた戯曲であった。広島と長崎の原子爆弾投下の惨事を聞き、MacColl は、Theatre Workshop の団員であり科学の専門知識が豊富であった Alf Smyth と Bill Davidson の助けを得て、*Uranium 235* の執筆をはじめた。その際、原子爆弾の製造と開発における詳細な報告書 *The Smyth Report* (正式名 *Atomic Energy for Military Purposes* (1945)) を参照した。*Uranium 235* は、古代ギリシャから現代までの原子科学の歴史をタイムトラベル形式に展開している。冒頭には、科学者に扮した役者が登場し、科学は人びとによってよくも悪くも使えることを弁明する。その根拠として、すべての万物は原子であると説いた古代ギリシャの Democritus、地動説や原子論を説き教会に火刑に処されたルネサンス時代の Giordano Bruno、産業革命時代に原子を科学に取り入れた John Dalton、放射能物質を含むラジウムを発見した Maria Curie、最後には原爆をつくりだす方程式を発見した Einstein が登場し、原子科学への長い道筋が説明される。本発表では、(1)序幕のモノローグ (2) 音楽的側面 (3)二つのエンディングという観点から、*Uranium 235* のテキスト分析を行った。

(1) 序幕のモノローグ

Uranium 235 の序幕において、家や教会の屋根の上に登り空襲や爆弾を確認する火災監視員が舞台上上がり、モノローグを暗唱する。“This is the hour / When the death is rationed out, / When iron eggs, fruit of some monstrous couplings in Hell / Are hatched in blood. / This is the hour when cities rise up / Shrinking in the night / And lamentations sound from iron throats, / This is destruction's hour” (Goorney and MacColl 75). このモノローグの中に核表象が幾つも見られる。まず“iron eggs”(鉄の卵)は原子爆弾を彷彿させる。さらに“fruit of some monstrous couplings in Hell”(地獄の、奇怪な結合によってできた産物)という比喩的表現は、原子爆弾がウラニウムとプラトニウムの化学結合によって生み出されたことを暗示する。鉄の卵が“are hatched in blood”(血にまみれて孵化する)という表現は、核分裂によって引き起こされたエネルギー爆発とそれによって命を失った市民の血を象徴的に表している。モノローグの中に描かれる核表象は、“This is the hour”という繰り返し表現に、緊迫した重みを与えている。しかし希望を見出す言葉もモノローグの中に紡ぎ出されていることにも注目したい。“Men have survived the catastrophes before / And those who crouched despair in a pit / Have often lived to tell their friends of it (Goorney and MacColl 75). 戦争から生き残った者たちは、彼らの経験を他者に語る役割がある。戯曲はその役割を手助けする手段である。*Uranium 235* は、原子物理化学の歴史を辿り、観客と共に、原爆の悲劇を繰り返さないための解決策を模索するプロセスを取っている。このモノローグは MacColl が *Uranium 235* に込めたメッセージが隠れている。

(2) 音楽的側面

MacColl は、戯曲の中に、当時よく知られた歌謡曲やフォークソング、自作の歌を盛り込むことを得意とした。 *Uranium 235* の前年に書かれた *Johnny Noble* (1945) という戯曲では、音楽とダンスが作品の一貫性をつくりだしているが、*Uranium 235* における音楽は、MacColl によると、「異なるイデオロムのぶつかり合い」(Grooney and MacColl liv) を助長するために使われる。 *Uranium 235* では自然の成り立ちや真実を純粋に追求するために科学の研究に生涯を捧げたものの、その科学の成果が人類を破壊する兵器として使われてしまう矛盾に苦しむ科学者の苦悩と無関心であり続ける若者たちの対比が描く際、音楽が重要な役割を果たしている。科学者が原子爆弾の脅威について、若い恋人たちに訴えようとする場面がある。しかし彼らは、口説き文句の言葉をティン・パン・アレーの陳腐な歌詞で並べて、スウィング・ジャズのダンスに夢中になり、一向に科学者の訴えに気づこうとしない。イギリスでは 1920 年代にジャズが大流行し、その熱狂ぶりは、Hobsbawm の言葉を借りれば、“a new epidemic of mass social dancing (集団社交ダンスの新しい疫病)” (268) であった。中には、スウィング・ジャズを「淫らで、騒がしく、非常に馬鹿げたもの」 (“Sensual” 4) として軽視する見方も少なくはなかった。MacColl 自身は、Louis Armstrong や Roll Morton といったジャズミュージシャンの LP レコードを 10 代の時から愛聴していたが、商業化とマスカルチャーが連想されるスウィング・ジャズが、人々を受動的な消費者と化させ批判的思考が失われる恐れがあるという、フランクフルト学派のアドルノのポピュラー音楽批判に通じるような考えのもとで、ジャズ音楽を劇中で使った。これは、後に MacColl がフォークリヴァイヴァルを展開する際に、同じ理論で、当時流行っていたアメリカのポピュラー音楽に対抗している。MacColl が推し進めたフォーククラブでは、人々がコミュニティを作り、パフォーマーと観客の距離が少ない空間で、ともに伝統歌を歌える場所として機能している。音楽のあり方に関する MacColl の考えは、すでに *Uranium 235* の中でも垣間見ることが可能だ。

(3) 二つのエンディング

Uranium 235 には二つエンディングがある。1946 年に書かれたエンディングでは、擬人化した原子力エネルギーが登場し、“I will go where you go. If you work for war I will work with you. If you work for peace I will work too. There are two roads” (Goorney and MacColl 126) と述べる。そして役者全員が原子科学を戦争あるいは平和のために使うのかどうか、“Which way are you going?” と観客に呼びかける形式をとっている。これは、MacColl によるとアメリカの第 34 代大統領 Eisenhower の *Atoms for Peace* (1953) による演説からの引用であった。明らかにこの時点では、MacColl は原子力エネルギーを武器として使用することに反対し、平和的使用には一筋の希望を感じていたわけだが、1950 年以降に世界中でおこった原子炉事故を目の当たりにし、その後の MacColl は反原爆のみならず、反原発という政治的思想を持つようになった。音楽活動では、1958 年からは CND 運動(核兵器撤廃運動)に参加し、音楽を通して核のない世界を呼びかけた。被爆国の日本との関わりに触れるならば、浅田石二作詞、木下航二作曲の『原爆許すまじ』(1954) を *Never Again the A-Bomb* と 1955 年に英訳し、歌を世界に広めた役割を担っている。1986 年に *Uranium 235* が再出版する際に、MacColl は新たなエンディングを書き、世界中で起こった原子炉事故の現状と原子力発電所が放出する放射能が自然破壊をもたらすことを指摘し Eisenhower の *Atoms for Peace* は誤っていたのだと主張する。そして、人々が世界を良くするために真剣に考え、行動を起こすことの必要性を訴える。*Uranium 235* は、決して過去の話ではなく、今の我々が住む世界でも十分に通じる戯曲である。

参考文献

- Cox, Peter. *Set into Song: Ewan MacColl, Charles Peter, Peggy Seeger and the Radio Ballads*. Labatie Books, 2008.
- Goorney Howard and Ewan MacColl. *Agit-Prop to Theatre Workshop: Political Playscripts: 1930-50*. Manchester UP, 1986.
- Hobsbawm, Eric. *Uncommon People: Resistance, Rebellion, and Jazz*. The New Press, 1998.
- “Sensual Jazz.” *Westminster Gazette*, September 9, 1926, p.4.
- Wills, Kirk. “The Origin of British Nuclear Culture: 1895-1929.” *Journal of British Studies*. Vol. 34, no.1, 1995, pp. 59-89.